

博士課程教育リーディングプログラム 平成29年度プログラム実施状況報告書

採択年度	平成25年度		
機関名	京都大学	全体責任者（学長）	山極 壽一
類型	オンリーワン型	プログラム責任者	北野 正雄
整理番号	U04	プログラムコーディネーター	松沢 哲郎
プログラム名称	霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院		

<プログラム進捗状況概要>

1. プログラムの目的・大学の改革構想

霊長類学は日本から世界に向けて発信し日本が世界の第一線を保持してきた稀有な学問である。霊長類学を基盤にして、大型の絶滅危惧種を対象にした「ワイルドライフサイエンス」という新興の学問分野を確立しつつある。そこで必要とされているのは、フィールドワークを共通基盤として、人間のこころ・からだ・くらし・ゲノムといった本性全体の理解を深めつつ、「地球社会の調和ある共存」という京都大学の憲章が掲げる理念を実現する実践活動である。ワイルドライフすなわち生き物すべての生存の連環を科学する分野で、フィールドワークによって培った「知行合一」の精神によって、学問と実践をつなぐグローバルリーダーの人材育成がいまこそ求められている。霊長類学を基盤とした研究が学問の最先端を担っているが、欧米にあって日本に明確に欠けているものが3つある。

- ①生物保全の専門家として国際機関・NGO等で働く若手人材の養成、
- ②博物館ならびに動物園・水族館等におけるキュレーター養成とフィールドミュージアムの実現、
- ③一国まるごとを対象としたアウトリーチ活動すなわち長い歳月をかけて特定の国との結びつきを深める活動、である。

この3つの欠陥を逆に将来の伸びしろと考えたい。研究のための研究ではない。学問・教育・実践の新しいニッチとして、国際機関やNGOで、博物館や動物園等で、そして諸外国において、日本の眼に見える貢献を果たす人材を育成する。学内の研究者のみならず、外交官、地域行政、法曹、国際NGO、動物園・博物館関係者などからなるプログラム分担者をそろえ、この3つのキャリアパスを明確に意識した体制を構築する。なお、日本は先進国で唯一、霊長類が住む国であり、近年、野生のクマ、シカ、カモシカ、ニホンザルがヒトとのあつれきを増加させ、各地で対策に追われている。このような実態を踏まえ、国内のワイルドライフに対して、世界に誇れる管理体制の構築をおこなう人材の育成にも力点を置く。

2. プログラムの進捗状況

採択当初からL3編入制度を導入していることにより、平成29年度は5学年35名の履修生がそろい、6名の仮修了生および1名の修了生を輩出した。欧米などからの外国人履修生は14名（41%）にのぼり、前年度に引き続き、申請当初の目標を達成した。平成29年度のプログラムの進捗状況を以下の項目ごとに詳述する。

①プログラムの実施・運営:必修の8実習「インターラボ」「幸島実習」「屋久島実習」「ゲノム実習」「比較認知科学実習／動物福祉実習」「笹ヶ峰実習」「動物園・博物館実習」「自主フィールドワーク実習」を実施した。また座学として、英語が公用語の「アシュラ・セミナー」を11回、公用語を定めない「ブッダ・セミナー」を6回実施した。特に実習は年に2回ずつ実施することで、履修生の所属研究科の講義や自主的なフィールドワークの妨げとならないよう配慮した。また、実習実施の拠点の維持と活用にも力を注いだ。熊本サンクチュアリ、幸島の野生ニホンザル施設、屋久島の野生のサルとシカの調査施設、公益財団法人日本モンキーセンターなどである。国外では、アフリカ、中南米、インド・東南アジアの3つの熱帯林を中心とした野生動物のホットスポットが挙げられる。履修生は、L1からすぐに、これらの海外拠点で2～6ヵ月の中長期にわたって自主企画のフィールドワークをおこなった。

②連携体制の維持・強化:履修生を広く深く支援する教育研究体制を強化した。プログラムの意思決定は、学内分担者の全員からなる月例の協議員会で、その中核としてヘッドクォーター（HQ）制度をとった。コーディネーターを含む9名のHQがいて、諸事の運営を審議する。特定教員7名をはじめ、英語に堪能な事務職員を配置し、協力して履修生をサポートした。プログラムの方針・運営状況・カリキュラム・成果・履修生の動向などについて、対内外の情報・広報は、すべて一元的にHP（<http://www.wildlife-science.org/>）に集約して共有した。年2回開催（9/26-28と3/3-5）のThe International Symposium on Primatology and Wildlife Scienceで、履修生や外国人協力者（IC）も含めた100名超のプログラム関係者が一堂に会することで、プログラムの方向性や進捗状況を確認し、連携強化を図った。なお、9月実施シンポジウムは平成29年度秋入学履修生の、3月実施シンポジウムは平成30年度春入学の履修生の入試をそれぞれ兼ねていて、前年度を上回る応募者があった。加えて、日本学術会議・基礎生物学委員会・統合生物学委員会合同ワイルドライフサイエンス分科会にてプログラムコーディネーターが委員長を務めることで、長期的かつ学際的な評価・支援基盤を固めた。さらにプログラムの「実践の場」として、19の動物園・水族館・博物館と連携協定を結んでいるが、特に公益財団法人日本モンキーセンター（以下JMC）や京都市動物園では、履修生によるアウトリーチ活動も活発化している。JMC発行の季刊誌「モンキー」の刊行については、本プログラムが全面的に協力し、プログラムの活動PRの媒体となっている。国内ワイルドライフサイエンスとの連携も継続しており、特に屋久島は毎年2回実習で訪れるなかで「屋久島学ソサエティ（<http://yakushimagakusociety.hateblo.jp/>）」を中核とした地域住民との協働が緊密である。また履修生が継続的に調査をおこなっている御蔵島では、島内新聞でイルカの生態に関する情報をリアルタイムで発信するなど、地元の観光協会や東京都環境局との人的交流を履修生が主体となって築き上げている。

③キャリアパスを見据えた履修生の自主性の涵養と支援:必修の「自主フィールドワーク実習」では、履修生が自主企画の海外研修をおこなうことで、自発的なプランニング能力の向上を図り、出口となる保全の専門家や、キュレーターや、アウトリーチ活動の実践者の育成につなげている。個人的なフィールドワークに限らず、履修生のイニシアチブによる自主企画の取組も奨励し、運営・実践能力の涵養を図った。具体的には、「Conserv' Session 環境保全映画の上映会と講演会（月次開催）」や「丸の内キッズジャンボリー出展（8/15-17）」等である。さらに、プログラム担当者の堀江正彦（前駐マレーシア大使・地球環境問題担当大使）らの協力を得て、IUCN（国際自然保護連合）インターン、UNESCO-MAB（ユネスコ人間と生物圏計画）インターン、環境省インターンを実施した。環境省や日本科学未来館との交流人事を継続し、本学で学位取得した外国人教員を採用して、ロールモデルとなる若手教員が履修生の指導にあたった。

④優秀な履修生の継続的な獲得と支援:L3編入制度、春秋の国際入試を実施し、秋入学者へのカリキュラム対応を整備して、優秀な留学生を獲得した。広報努力を継続し、HPを見ればプログラムのすべてがわかるようにした。学部生や高校生を対象としたプログラム担当者による実習も引き続き実施していて、優秀な自大学出身者の獲得につながっている。奨励金の給付はおこなっていないが、その代わりに、「いつでも・どこでも・なんでも」を合

言葉として、履修生のフィールドワーク旅費（航空券代や日当宿泊費）を全面的に支援した。以上の成果として、H29年度の履修生の4割が、JSPS特別研究員（DC1/DC2）／国費留学生である。博士課程以上に限れば、実に6割以上の履修生が何らかのScholarshipを獲得している。また、多くの履修生が学会等で受賞している（例：GAO Jie（L2）が8/30-9/1開催の行動関連5学会・研究会合同大会「行動2017」にて日本動物心理学会最優秀発表賞受賞）。